

工事現場から出土した世界最高のローマ時代のモザイク画

「文化遺産」化の過程と観光資源化

田中英資 (ANA 総合研究所)

本発表は、考古遺跡やそこからの出土品の文化遺産化と観光の関係について検討する。近年の文化遺産をめぐる問題についての社会人類学的な議論は、有形・無形の文化は、遺産 ('heritage') として、あたかも所有される「モノ」として具体化され、特定の集団がそうした物質化された文化の所有者とみなされる点を明らかにしてきた。また、文化遺産を観光資源と捉える観光の文脈においても、誰が誰をターゲットに、誰の文化のどのような側面を文化遺産と捉えるのかが鍵となることも指摘されている。これらを踏まえて、本発表では、過去の痕跡が文化遺産とみなされ、観光資源化されていく過程においてそれぞれの集団が主張する文化遺産保護のあり方に着目する。誰が文化遺産を守るべきなのか、どこで文化遺産を守るのか、そういったことを決めるのは誰か、といったことが文化遺産をめぐる議論で大きな問題となる点からもわかるように、文化遺産の保護は、しばしば文化遺産の所有と結び付けられて主張されるためである。そこで、本発表では、文化遺産の観光資源としての価値が国家や考古学者、地元の人々など、そうした遺産の扱いに利害関心を持つ集団の交渉の中でどのように表現されるのか、そうした過程において文化遺産のどのような側面が強調されているのかを明らかにする。

そのための事例として、2000年に行われたトルコ東南部の都市ガズィアンテップ (Gaziantep) 近郊にある、ユーフラテス川沿いの都市遺跡ゼウグマ (Zeugma) の緊急発掘とそれによって発見されたローマ時代のモザイク画の事例を取り上げる。2000年の春から夏にかけて、ユーフラテス川へのダム建設によって沈もうとしていた遺跡から大量の非常に保存状態の良いローマ時代のモザイク画が発見されたことが、国際的なメディアに取り上げられたことでトルコ国内の注目を集めた。発見されたモザイク画は、トルコでは質・量ともに世界最高水準のモザイク画であると位置づけられて、重要な文化遺産とみなされるようになり、さらに、この過程で周辺住民のゼウグマ遺跡に対する意識にも変化が見られるようになった。特に、ガズィアンテップではゼウグマから出土したモザイク画を重要な地域の観光資源とみなされるようになり、それが中央政府との間に緊張関係を生むようにもなったのである。そうした変化の表れが顕著であったのが、2004年のNATOサミット開催に合わせて、トルコ政府がイスタンブルでのモザイク画の展示を企画し、それがトルコメディアの注目を集めた時であった。

ゼウグマのモザイク画がトルコの重要な文化遺産とされ、観光資源として認知されていくこの過程を分析することを通して、本発表ではこの過程に関わった様々な立場の集団 (トルコ政府、考古学者、地元の人々など) がどのようにモザイク画の「文化遺産」としての重要性を主張していたかについて検討する。まず、文化遺産をめぐる問題についての既存研究について所有と保護の観点からまとめる。特に2000年に行われた緊急発掘と2004年にトルコ政府が計画したモザイク画のイスタンブルでの展示計画に着目し、ゼウグマ遺跡から発見されたローマ時代のモザイク画の「文化遺産化」と「観光化」のプロセスについてみていく。特に、モザイク画に利害関心をもつ集団が、文化遺産としての意義をいうためにどのように「保護」に言及していたのかをみていく。そうした集団の主張する保護のあり方の違いが、観光資源としての位置付けの違い、さらには文化遺産の管理・所有への主張の違いとなっていたことを示すことを通して、文化の遺産としての観光資源化は、1つの主体によって行われるのではなく、ローカル、ナショナル、さらにグローバル、といった様々な主体のネゴシエーションのなかで行われていくことを示す。

【 文化遺産、保護、所有、観光開発、トルコ 】